

看護専門学校入学後1年間のヒューマン・ケアリングの認識の変化

近藤 奈緒子* 眞山 かおり** 川野雅資***

*神奈川県健康医療局保健医療部医療整備・人材課(Medical Service System Improvement and Human Resources Division, Healthcare and Medical Services Department, Health and Medical Services Bureau, Kanagawa Prefectural Government) **神奈川県立よこはま看護専門学校 (Kanagawa Prefectural Yokohama School of Nursing) ***本校非常勤講師, 心の相談室荻窪 室長

キーワード： 看護専門学校 ヒューマン・ケアリング 新カリキュラム

はじめに

わが国における人口及び疾病構造の変化、療養の場の多様化等を踏まえ、看護基礎教育において2022年から新カリキュラムが施行された。新カリキュラムでは、コミュニケーション能力や臨床判断能力等に必要な基礎的能力の強化¹⁾が求められている。A校(3年課程看護専門学校)では、2022年度新カリキュラム導入するにあたり、教育理念であるWatson²⁾のヒューマン・ケアリング理論に基づいたヒューマン・ケアリングを基盤とし、看護の本質であるヒューマン・ケアリングの意義や重要性を学ぶことを目的とした「ヒューマン・ケアリングⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を各年次に配置した。先行研究³⁾では、「ヒューマン・ケアリングⅠ」を履修した新カリキュラム1年次、旧カリキュラム2年次、3年次、卒業生を対象にアンケートを実施し、差異をみたところ、学年を経るごとにヒューマン・ケアリングへの認識の向上がみられた。A校の入学生がヒューマン・ケアリングを認識し、実習を経験した後、どのように認識が変化するか可視化したいと考え、本研究に至った。

I 研究目的

A校の1年次入学時から後期1月実習経験後までのヒューマン・ケアリングの認識の変化を明らかにし、新カリキュラムにおける学生への支援について示唆を得る。

II 用語の定義 (A校における定義)

ヒューマン・ケアリング：「人との関係性で成り立ち、自己と他者に愛情をもって、心を込めて存在する。自己と他者への感受性を磨き、人生や生活すべてについて関心をもつ。敬意をこめて支援することにより、双方の人的成長をもたらすもの」とする。

III 研究方法及び倫理的配慮

1 調査対象

2022年4月に入学した1年次93名。高校卒業者とともに社会人や大学卒業者が含まれる。

2 研究方法 (データ収集及び分析)

メールシステムのアンケート機能を使用したアンケート調査。2022年4月及び8月、2023年2月の計3回実施。設問構成は、Watson⁴⁾の著書を参考にし、本内容に精通している研究者(川野氏)の指導のもと、研究者らが作成したケアリングに関する24項目(図1アンケート結果参照)で、「5いつもそうである」「4わりとそうである」「3時々そうである」「2あまりそうではない」「1全くそうではない」の5段階尺度を用いた。回答時間は5分程度を目安とした。

データ分析は、単純集計を行い、1年次の4月、8月、2月における変化を分析した。

3 倫理的配慮

本研究は、事前にA校研究倫理委員会の許可を受けた。調査対象者には、研究の趣旨を説明し、回答の有無にかかわらず学業等への利益及び不利益にならないこと、個人が特定されないこと、紀要等研究発表としてまとめることについて説明した。また、アンケート回答をもって研究への参加同意となる旨を説明した。

IV 結果

1) アンケート回収結果 回収数は有効回答数と一致

4月 回収数85/93名 (回収率91.4%)

8月 回収数64/93名 (回収率68.8%)

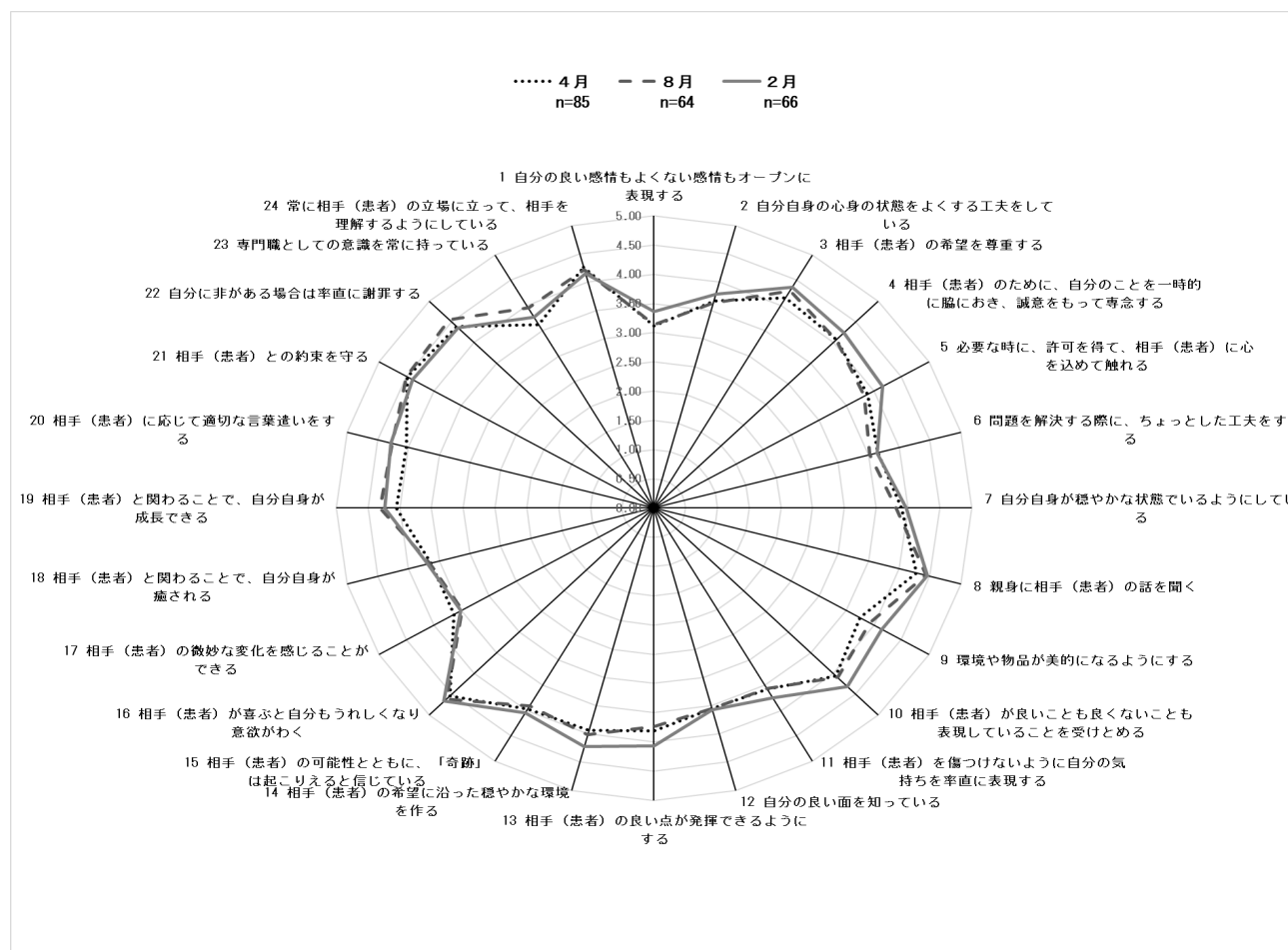


図1 アンケート結果（4月・8月・2月比較）

V 考察

4月の入学時から2月までの1年間で平均値を超えたものは、「3相手の希望を尊重」する「4相手のために、自分のことを一時的に脇におき、誠意をもって専念する」という対象を尊重した態度、「8親身に相手の話を聞く」「10相手が良いことも良くないことも表現していることを受けとめる」という傾聴や受容的態度があった。また、「16相手が喜ぶと自分もうれしくなり意欲がわく」「19相手と関わることで、自分自身が成長できる」「20相手に応じて適切な言葉遣いをする」「21相手との約束を守る」「22自分に非がある場合は率直に謝罪する」「24常に相手の立場に立って、相手を理解するようにしている」という相手との相互性をもとに相手の気持ちを慮る行動とともに、「14相手（患者）の希望に沿った穏やかな環境を作る」といった環境調整にも着目しており、このことから、看護師を目指す入学時から人への関心が高いことがうかがえ、ヒューマン・ケアリングの授業や実習経験がこうした資質や関心を促進し、総平均値を上昇させていたと考えられる。加えて、平均値を下回っているが、4月より2月の方が上昇した項目は11項目あり、1年間の学習を経て、学生に変化をもたらしていると考えられる。

一方で、平均値を下回り、4月に比較し2月が下降したものは、「6問題を解決する際に、ちょっとした工夫をする」「17相手（患者）の微妙な変化を感じることができる」であったが、これは実習での患者への関わりからその難しさを感じ取った可能性がある。さらに、「1自分の良い感情もよくない感情もオープンに表現する」は、4月に比較し2月の上昇は最も大きいものの全ての月で最低値を示し、自己表現が苦手な一面もみえた。

この他、4月に比較し2月の上昇が大きかった項目は、「9環境や物品が美的になるようにする」「14相手（患者）の希望に沿った穏やかな環境を作る」「5必要な時に、許可を得て、相手（患者）に心を込めて触れる」等があり、学内での学んだ安全で安楽な環境整備やタッチングを意識し、実習で患者に関わっていたことが推察できる。こうした実践に至るには教員の支援が不可欠だったと考えられる。

VI 結論

総平均値は月を追うごとに増加し、4月の入学時から2月までの1年間で平均値を超えたものは、対象を尊重した態度、傾聴や受容的態度、相手との相互性をもとに相手の気持ちを慮る行動、環境調整があったが、一方で自己表現が苦手な面も明らかになった。

学生のケアリングの経験を尊重し経験を意味づけ、自己表現できるようにすること、学内の授業や実習経験に加え、教員との関わりや看護師を目指す学生同士の日々の関わり合いもケアリングを促すプラスの要因となりうるため、教員がロールモデルを意図的に実践することが重要である。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 看護基礎教育検討会報告書. 2019.
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (参照 2024年8月13日)
- 2) Jean Watson. 稲岡文昭, 稲岡光子, 戸村道子訳. ワトソン看護論—ヒューマン・ケアリングの科学 第2版. 医学書院, 2014.
- 3) 大野明美, 近藤奈緒子, 米山若菜, 眞山かおり, 佐藤和美, 川野雅資. 看護学生における学年別ヒューマン・ケアリングの成長と現状. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 14, 26-32, 2022.
- 4) 2) 再掲